

未来へ伝えよう昔の話

下町文化

第 191 号

平成10年2月15日

発行

江東区教育委員会
生涯学習部生涯学習課



秋山家と養魚池（大正3年 現千石2丁目）

平成8・9年度民俗総合調査

深川東部の暮らし

江東区教育委員会は、昭和59年度より、区内をいくつかのブロックに分けて総合的な民俗調査を行っています。

平成9年度では、昨年度に引き続いて、深川東部（毛利、住吉、猿江、扇橋、石島、千田、海辺、千石、東陽）の民俗調査を実施しました。ここで調査結果の一部をご紹介します。

千田周辺と金魚池

○大正6年の水害で、石島、扇橋、千田、海辺町一帯は、泳ぐほどの水が出た。なにしろ出水が一番問題だった。台風の度に大水対策だった。

震災後の区画整理の時、小松橋通りを境に千田町に変わってしまっ、古い町名に親しみがあつた当時の住んでいた人はなんとなく落ちつかないようだった。これと同じ頃に、氏神様も富岡八幡さまから宇迦八幡さま（千田神社）へと地域が変わってしまった。扇橋、千田、海辺の住民が地元神社があるのだからとの意見が多かったのだ。

千田交番の脇にある子育て地蔵の公園になっているところは、堀があつて、あの辺りが掘留だった。その堀

の先に秋山金魚堀があつた（千石）。水が出ると、表戸が格子だったので、金魚が家の中へ泳いで来たものだった。

○戦前は金魚屋もこの辺り（千田）に多く、鰻橋の近くにもあつた。秋山金魚の輸出看板をかけるとうよく売れた。

○千田子育て地蔵の縁日は、戦前は



現在の様子



金魚池と売子

海辺町から千田まで出ていたが、戦後は交番から200メートルだけ許可が出て、場所が足りずに道の両側に縁日が出たこともあった。とてもにぎやかで、100軒ほど出て、4時から12時まで夜店でにぎわっていた。

まつりと自治会

○東陽4丁目で、お祭りを始めたのは昭和40年代です。それまでは人家が少なく、とてもお祭りができなかったが、当時の深川郵便局の広場を借りて、盆踊りをしたのが始まり。八月の学校休みを利用した。名前は「東陽4丁目町会盆踊り」。神輿を担ぐまでの祭りに成長したのは、昭和40年後半、それもリースだった。昭和52年、あるきっかけから自前の神輿を持つようになって、富岡八幡の祭りと同じ日に祭りを行うようになった。



千田神社の祭礼

た。名前は「八幡まつり」だが、連合には加わらなかったたので、町内だけで祭りをした。

以前の神輿は、当時の町会長が千葉の勝浦の神社からもらい受けたもの。さぞ町会の人々も喜ぶだろうと期待したところ総スカン。祭りが終わった後どこにしまうのか、そもそも担ぎ手がいないじゃないかと言われる始末。そこで近所の高層住宅を回って担ぎ手を募集して歩いた。それまで元から住んでいた住人とマシンの住人は余り付き合いがなかったが、たくさんの方が手伝ってくれた。お祭りのお陰で町の中に一体感が生まれた。

お祭りまでは、それぞれの自治会がバラバラに活動していたが、昭和53年に東陽4丁目連合町会として団結して活動するようになった。神輿がきっかけとなって町の中にご縁が広がっていった。

映画

○猿江6ヶ町には映画館が2軒、演芸場が2軒ありました。猿江の映画館は、今でいう場末の映画館で、私の子供の頃(戦前)は無声映画で、映写幕の前にオーケストラボックス



千田シネマ (昭和30年)

があり、映写幕の横に弁士が立ち、映画の説明をしました。映画は大都映画とか新興映画で、後に数社が合併して日活映画となりました。

入場料は、確か大人10銭、子供5銭だったと思います。そのころ、一流の映画館は封切館といって、入場料は50銭でした。

弟は背丈が小さく子供並だったので、あらかじめお前は学校に行っていないというんだと言い含めておいて、入口でこの子はまだ学校に行っていないんだから只にしてみようよと言って、さっさと入ろうとするんです。そうすると切符のもぎり屋(テケツ)が、チョイと兄さん待って、その子は学校に行っているようだよ、何年生、と聞いてくるから、弟に、僕はまだ学校に行っていないよ、と言わせて、さっさと入ってし

まうのです。中に入ると残ったお金(5銭)で、塩豆か何かを買って、みんなで分けて食べました。

印象に残る映画に「まぼろし城」があり、なかなか評判のよい映画でした。

少し大きくなると錦糸町の錦糸館、大島の東郷館、緑町の緑館など、洋画に憧れて出かけました。当時はチャップリンとかキートンの時代で、もちろん白黒でトーキーになったのは昭和10年ころだったと思います。

○扇橋館とか千石館の付近の道路には、夜店が出て大変にぎやかだった。芝居小屋があって、子供の頃にお袋に連れられて見に行った。サイレント時代で、トーキーになる前から、昭和7、8年より前だと思う。弁士がいて説明をするが、うまいのと下手なのでは、客の入りも違った。あのころはキングコングなんていう映画を見た。昔は正月になると新興映画とかの俳優が来て、挨拶をした。入場料は、確か5〜10銭くらいだった。夜になって暗くなると、小学校の校庭にスクリーンを張って、教育映画が上映された。昭和7、8年ころだったと思うが、トーキーだった。発声映画といって音が出た。

第十六回時雨忌大会記念講演会

俳感・実感

俳人・『木語』主宰 山田みづえ 先生

私を選びました題が実に変で、「俳感・実感」なんて、何を話してもいいようにしてあります。私は無器用なので俳句だけしかやっておりません。心の内を、思いの丈を全部言っているのが短歌でございまして、俳句の方は、ことに石田波郷門ですと、「ものが言えない文芸である」とはつきり申し上げておりました。私も「言えない、しかし言いたい」というところの極みでやっているのがいいと思うのです。俳句は嬉しいことはそう詠えなくて、悲しいとき、辛いときというのは、非常に切羽詰まったことが詠えるんですね。そういうところに不思議な力があるような気がします。

先日松山の子規記念博物館で話をしたのですが、九月二三日だったので、子規の『仰臥漫録』の九月二三日の所をピックアップしていただきました。丁度芭蕉と蕪村の句を較べているんです。



「五月雨をあつめて早し最上川」の芭蕉の句を、今まで古今有数の句と信じていたけれど、今日見ると「あつめて」という語が巧みであつて甚だ面白くない。それから見ると蕪村の「五月雨や大河を前に家二軒」の方が遙かに進歩していると書いてるんです。二四日の所では、やはり芭蕉の「荒海や佐渡によこたふ天河」を、巧みもなく疵もなければ明治のように複雑な世の中になつてはこんな簡単な句にては承知すまじなんて書いてるんです。子規と言えども理屈にならないですね。なんでも芭蕉を悪い方へ持っていて、蕪村を良い方へ持ってくる。だけども子規は、芭蕉の驥尾に付していくだけでは駄目だと、反面教師みたいにして言ってくれているんだらうと思うんです。子規はそういう風に言つて、もう少し俳句

というものを革新してみたい気持ちがあったからこそ書いたんだと思います。

私は昭和三十年にひとりになったとき、つまり上京・勤めるチャンスがあつたとき、父に「ただ勤めて終わるつもりか」と言われたのです。その時つい口をすべらせて「俳句をやりたいから」と言っちゃったんです。すると父が「それはいいかもしれない。誰につくつもりだ」と聞かれたので、私はよく決めていなかったけれど、大体そう思っていたので「石田波郷という人に師事したい」と言ったら、「ふうん」と言つて一寸考えてから「いいんじゃないか」と言いました。それから実際に石田波郷の所に行くまでに、二年間位、ちゃんと経済的に成り立たないと一人前に口が効けないから、自立出来てから、手紙を出しますと、返事が来て、「鶴」という雑誌を取つて、投句をして選を受けるということが一番の勉強です。とありました。昭和三年の三月頃です。「鶴」はさかのぼって一月号から取り、「鶴」に入りました。私の一生涯のクリーンヒットが石田波郷を先生として選んだことです。

皆さんには俳句の見えない壁が時々出て来るらしいけれど、本当は壁ではありません。「そう息つめないで一寸休みなさい」と言つてくれた



石田波郷句碑（妙久寺）

にすぎないと思うべきです。「先達のあの人がああいう表現をしようまいな」とわかることが先です。何んでもいいから作っていたのではただの句なのですね。自分の重量を作品に掛けなければならぬ時は掛けないと。当り障りのない、ちつとも迫力のない句は無難で、それで自分が満足ならばそれだけのことなんです。でも人の心を打つような句を作るでも取つて置きたいというような句を作るには多少精進しなければ。人の句の良い悪いがわかるのは、皆さんの経歴、手仕事、何でも一つことをずうつとやって来た、それらの力が全部作品に覆い被さってくると思つてください。それらが力になるんですから、それをあつちにおいておいて、ふにやふにやした句は作らないでください。先ず手近かなことから積み重ねてゆくことが大切です。

*この記録は、昨年10月12日に行われた講演会の内容を要約したものです。

おしらせ

江東史談会例会

2月の例会は休会です。次回例会は3月になります。

芭蕉記念館から

ジュニア俳句教室

日時 3月14日(土) 午前9時30分

(集合9時20分)

会場 2階研修室

内容 俳句をつくってみよう

対象 区内在住の小学生30人

(先着順)

費用 無料(筆記用具持参)

締切 3月13日(金)
申込 窓口または電話で
◇芭蕉記念館

江東区常盤1-6-3

(3631) 1448

工芸館から

伝統の技 実演公開

毎月第一・第三日曜日に工匠会番

館(森下文化センター内)で行って

います職人さんの今後の実演日程は次のとおりです。

江戸切子の繊細な輝きと、温もりのある木彫美が生み出される工程を、是非ご覧ください。

3月1日 江戸切子 須田 富雄



3月15日 木彫 岸本 忠雄



*時間はいずれも午後1時〜3時

ここにも歴史があった

写真の時刻表は都電36系統のもです。



都電36系統は、錦糸堀から築地までの8・809キロメートルを運行していました。この時刻表は新大橋のものでしょうか。築地行の始発は午前5時37分、終電車は午後10時48分、5分から9分間隔で運転されていたことがわかります。

都電は昭和30年(1955)に乗客数のピークを迎えますが、その後の乗客数は下降線の一途をたどり、

深刻な経営難に直面しました。この赤字問題に加え、都市道路交通の主流が自動車へと移ると、交通渋滞の元凶とみなされた都電は廃止へと向かい、昭和38年度以降順次撤去されるようになりました。

近代東京の都市交通の重要な手段となった都電は、東京の「現代化」の諸矛盾の波に飲み込まれて消えていったのです。

この資料は新大橋の金久保健二さんからご寄贈いただきました。

旧大石家住宅から

旧大石家住宅では3月3日の桃の節句にあわせて雛人形を飾ります。

内裏雛、三人官女、五人囃子など美しい雛壇飾りは、古民家のたたずまいと仙台堀川公園の木々により風情を増し、訪れる人を趣深く迎えてくれます。

雛人形の起源は古代にまでさかのぼりますが、桃の節句が庶民生活のなかに定着したのは江戸時代以降のことです。

旧大石家で飾る雛人形はいずれも区民の方から寄贈されたものです。長年使われてきたその風合いが、近代の一般家庭における桃の節句を想い起こさせてくれます。

雛壇飾りは、2月21日(土)から3月8日(日)まで展示しています。

ご覧になりたい方は、期間内の土・日曜日、午前10時から午後4時までに旧大石家住宅へおい

でください。

